

## ラトヴィアの Libeks とリトワニアの Dombrovski

—初期の Esperanto 文献—

川 崎 直 一\*

Libeks, latva—Dombrovski, litova

—Frutempaj lernolibroj de Esperanto—

Naokazu KAWASAKI

(1976年9月13日受理)

## は し が き

Zamenhof が, Esperanto を発表したのは, 1887年であった。それは, 40 p. のきわめて簡単な本で, ふつう Unua Libro (第1書)といわれる。そののちも, もちろん, Zamenhof のいろんな著作が, 言語としての Esperanto の発達に, チカラがあったのであるが, 世界のいろんな国ぐにの人たちも, Zamenhof の著書のすがたによりつつも, あるいは, Esperanto 文の文芸創作, あるいは, 国語のものを Esperanto に訳すことによって, あるいは, 学習書, 辞書をつくることによって, Esperanto の言語的発達をはかったのである。だから, Esperanto の言語的発達を, 歴史的にしらべるには, もちろん, Zamenhof の著書の研究がもっとも重要ではあるが, 各国の他の人たちの業績もしらべねばならない<sup>0)</sup>。

ここでとりあげるのは, ラトヴィアとリトワニアで, はじめて Esperanto の学習書を書いた Libeks と Dombrovski についてである。

ラトヴィアとリトワニアは, 現在は, ソ連を構成する共和国であるが, 19世紀末では, ロシア帝国の領土であった。ラトヴィア語とリトワニア語は, インド・ヨーロッパ語族のバルト語派に属する。どちらかというとも, ロシア語に近い<sup>0)</sup>。現在では, 文字はローマ字であるが, 1918年までは, fraktur であった。つずり字法も, 19世紀末と現在では, ちがうところがかなりある。ここでは, Dombrovski の使ったつずり字法をローマ字であらわすことにする。

文献解題としては, 原本のすがたそのままの図版をかかげ, 誤植にいたるまで説明すべきだが, ここでは, 著作のだいたいのすがたをうきばりにする程度の解説と考証(歴史的, 言語的)にとどめる。

以下略語を使う。Esp.=Esperanto. Zam.=Zamenhof.

## 注—1

- 0) Zam. の著作(かなりの数と分量がある)については, いままでおおくの研究が発表されているが, 他の古い人びとについては, ヨーロッパでも, その歴史的研究はじゅうぶんではない。この原因は,

\* 国文学(言語学)研究室

19世紀末の原本の入手が困難なことによる。しかし、ちかごろはゼロックスなど複写の技術が発達したので、原本の所在地さえみつければ、複写の入手も可能になったが、その所在地のわからないものがすくぶるおおいのである。

わたしが、この論文で使った fotokopio. Libeks のものは Gregor の、Dombrovski のものは伊東幹治の好意による。

1. 各国の最初の Esp. 学習書について、わたしがすでにその研究を発表したもの：

Tri Problemoj el Bogdanov, Plena Lernolibro por la Mondlingva de D-r Esperanto, Sofio, 1890. Oomoto, 1976, jan.-jun.

Kelkaj rimarkindaj derivaĵoj el L. Einstein, La Lingvo Internacia als beste Lösung des internationalen Weltsprache-Problems, 1888, Nürnberg, La Revuo Orienta, 1976, feb.

Origino de Korelativa Tabelo. Oomoto, 1975, sept.-dec.

2. E. Fraenkel, Die Baltischen Sprachen, : ihre Beziehungen zu einander und zu den indogermanischen Schwesteridiomen als Einführung in die baltische Sprachwissenschaft, 1950.

発表予定のもの：Unuaj Libroj : Huertas-hispana, Lorenc-ĉeĥa. La Revuo Orienta. Henry Phillips, An Attempt towards an International Language. La Revuo Orienta.

Zam. 以外の人の Esp. の言語的発達に対する功績については、たとえば、Gregor, La Plej fruaj senafiksaj kunmetaĵoj en Esp., Scienca Revuo, 1974-05 にみることができる。これは、ある合成語が、だれによって、いつ、はじめて使われたかの研究である。ただし、これには、重要な研究対象がおちている。例。Einstein (N-ro 15), Phillips (N-ro 22), …がない。それに、ここでとりあつかう Libeks, Dombrovski もない。わたしが、1976年夏、手にいれた Phillips の fotokopio によると、antaŭpensi が、はじめてかれによって使われた。

## 1. ラトヴィアの Libeks

1.1. タイトル・ページ。図版に示すように、ラトヴィア語で書かれている。Esp. 文のものはない。訳すと：Esp. 博士による国際語 “La lingvo internacia”——まえがき、文法、読みもの、Esp.-ラトヴィア語辞典、ラトヴィア語-Esp. 辞典。R. Libeks 編。Riga, 1889. Sichman 出版<sup>3)</sup>。

1.2. 検閲の日づけ<sup>4)</sup>。1889-03-20 (これはロシア語で)。

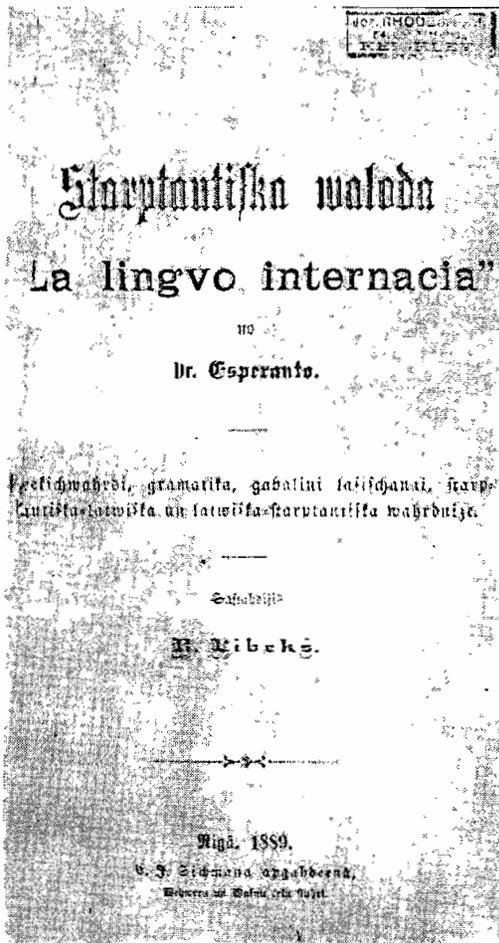
1.3. 著者。Zam. の Adresaro de la Esp.-istoj によると、Esp. をはじめたのは1889で、登録番号は548<sup>5)</sup>。Enciklopedio de Esp. によると、かれは教師であり、ラトヴィアの Esp 運動のバイオニア。1890年代にブラジルにいき、Courtinat によると、1899そこで死んだ。

ところで、この Libeks という名まえであるが、Libek という形ででていばあいがある。たとえば、Dombrovski, Lernolibro por litovoj, 1890のおわりについている Esp. の書目には、R. Libek. Starptautiska valoda となっているし、さらに、この Libeks じしんの学習書のおわりについている Esp. の書目にも、Libek. Starptautiska waloda となっているのである。エストニアの J. Palu のわたしへの手紙 (1976-08-17) によると：

“ラトヴィア語では、男性の名まえ (名詞も) は -s をもつが、これは発音されない。正しい書きかたは Libeks だが、これを発音的に書けば Libek となる。” (原文は Esp.)。しかし、Latvian (Teach Yourself Books), 1966や、Veksler-Jurik, Latyskij Jazyk, Riga, 1975には、そのような発音の注意はのっていない。

1.4. ページ数。88p.

1.5. まえがき。ラトヴィア語で28行。Esp. 文のものはない。その要点：



“国際語は、各民族を近づけ、国際間の敵対性をなくし、各民族をひとつの、より高い人間的目的へとよびかける。

これまでの試みのうちで、Dr. Esp. の Lingvo Internacia のみが、きわだっている。これは論理的なもので、単語の数をすくなくしている。

国際語はすべての人のものである。だから、めいめいは、これを学び、これを成功させねばならぬ。

この言語のすがたを正しく見定めるには、人がこれの深みと特長を研究したときのみ、それが可能となる。

この国際語には未来がある。すなわち、1) ことがらの偉大な必然性と、この言語の適格性。2) この短い期間に、日ごとにふえる支持者のむれ。3) この言語によって、おたがいが、より近く知りあいに成れるという確信。”

1.6. 文法. Libeks のまとめかたには、Einstein<sup>6)</sup> の影響がきわめておおきい。Einstein の本をみながら、じぶんの本を書いていったのであろう。そのような感じを、わたしは

2つの本を対照しながら、うけた。ただし、かれじしんの整理のあとがみられる。たとえば、

	Einstein		Libeks	
Nom.	la patro	der Vater	Nom.	la patro tehws
Gen.	de la patro	des Vaters	Gen.	de la patro tehwa
Dat.	al la patro	dem Vater	Dat.	al la patro tehwam
Acc.	la patron	den Vater	Akk.	la patron tehwu

まったく Einstein そのままである。ラトヴィア語の名詞の格としては、なお instrumentalis tehwu や, locativus tehwa があるが、それに対する Esp. の表現にはふれていない。この点、のちの Dombrovski とことなる。

ところが、形容詞のところでは、Einstein は“形容詞の変化は名詞とおなじ”とだけで、例は示していないが、Libeks は例をだしている。これは、読者に親切である。

Nom.	la bona patro	labais tehws
Gen.	de la bona patro	labà tehwa
Dat.	al la bona patro	labam tehwam
Akk.	la bonan patron	labo tehwu

korelativaj vortoj を、タテ、ヨコに配置したテーブルにしたのは、Einstein がはじめであるが、Libeks にもこれがある。Korelativaj vortoj の数は Einstein におなじ<sup>7)</sup>。

Einstein には、動詞の変化のうち、命令法の -u がぬけているが、おそらく不注意の結果であろう。Libeks には、これはちゃんとある。

接頭辞、接尾辞については、Libeks は Einstein のまとめかたにしたがっている。Einstein の用例はかなりおおいが、Libeks は、その数を適当に整理している。たとえば、-ar- は、Einstein 10例、Libeks 6例。すなわち、Libeks には mineralaro, akvaro, armaro, famiario, skarabaro がない。

しかし、Libeks は、接尾辞の重要なものをおとしている。-ant-, ont- の例があるのに、-int- はその項目すらないのである。この原因は、Einstien の書きかたにまどわされたのであろう。

Einstein	Libeks
33. -ing-	33. -ing-
33. -int-	
34. -ist-	34. -ist-

-ont- の例として、Libeks に

placo vokonta	weeta, kas, buhs wała
---------------	-----------------------

があるが、この意味がわかりにくい。ところが Einstein の -ont- の例に

placo vakonta	ein freiwerdender Platz
---------------	-------------------------

とあることをみると、Libeks の vokonta は vakonta の誤植であろう<sup>8)</sup>。

-an- の例のなかに

Livonio Widseme	livoniano widsemneeks
-----------------	-----------------------

がある。リヴォニアは、もとは、リヴォニア人が住んでいたが、その土地は、エストニアとリトワニアに分割されてしまった。エストニア語と同じ系統のリヴォニア語を話すリヴォニア人は、現在は、ラトヴィアの一部分にごくわずしかのこっていない。

1.7. 読みもの。

1.71. Zam. の作品を転載したもの。

a) Ekzercoj. これは、Libeks が注しているように、Dua Libro の Ekzercoj で、しかもそのぜんぶである<sup>9)</sup>。

b) Kanto de Studentoj. これも Dua Libro から。ただし、Amikinoj kaj mastrinoj がぬけている。不注意である。

c) El Heine. Unua Libro から。

e) Popoldiroj. Dua Libro から。

1.72. Einstein から転載したもの。

a) Sentencoj. ただし、

Einstein	Libeks
ĉirkaŭkuranta la tutan teron	ĉirkaŭkuranta tutan teron

b) Leteroj. 第2 (Paris, 2. Julio 1888) と、第3 (Paris, 15. Aprilo 1888) が Einstein にある。ちがう点は：

Einstein	Libeks
第2 Kara Sinjoro	Estimata Sinjoro
E. Grégoire	N. N.

Mi posedas la deziratajn konadojn...      Mi havas  
第3 Lebrun      N. N.

c) telegramoj. つぎの点だけ，ことなる.

Einstein      Libeks  
gratulas familio Meyer      mi kore gratulas

e) Mahte, rang' koksa wihrs jau klaht! は, Einstein の Mutter der Mann mit dem Coaks ist da! とおなじである. これは, 4行の文を11言語で Einstein は対照しているが, Libeks はさらにラトヴィア語をつけ加えて12言語としたのである.

1.73. Libeks じしんの作品.

a) Letero の第1 (Riga, 22, feb. 1889)<sup>10)</sup>.

b) Latvaj Popolkantoj. もちろんラトヴィア語からの訳. a, b, c, d の4つ. a のみが Grabowski, La Liro de la Esperantistoj, 1898 と Fundamenta Krestomatio にある. a は4節から成っているが, ここには, 第1節だけ示す (この第1節では, FK は Grabowski におなじ).

Libeks	Grabowski
Sur kampumon kapon metis,	Mi en kampo kapon metos
Por jegardi patrolandon;	Por defendi patrolandon.
Mi pli bone kapon donas,	Mi pli vole kapon donus,
Ol mi donus patrolandon.	Ol mi donus patrolandon.

kampumo, jegardi<sup>11)</sup> なんて, へんなものがある.

a の第4節の最後の行は

Libeks	Grabowski	FK
Koroneton pendos mi.	Tie koroneton mi.	Tie la koroneton mi.

Zam., Unua Libro の vortarfolio では, '王冠' は koron' である (ただしおなじ本の Heine には kron' であるが), しかし, Zam. は, かれの文のなかでは, koron' を使わなかった. Einstein (N-ro 15) の辞書には, koron' がある.

b, c, d の中のめずらしい表現.

<i>Jemetas purejon</i>	Revenante mi <i>jefaris</i>
Mi kun la moneroj.	Koronetojn de semingoj

また, Per floretoj sipon puŝis

Al la mian fianĉinon,

のごとく al のあとに -n をつけることは, 現在では, 行われない.

c) La monto „Dom” apud Dorpat.

Sur la hodiaŭa monto “Dom,, apud Urbo Dorpat estis iam sankta kampeto. Tie ĉi estis loko, kien Vanemuno kunvokis homojn kaj bestojn por ellerni paroladojn kaj kantojn de festo.

Tiam fariĝis en la aero granda bruado :Vanemuno sin flugetis teron. Li ordigis siajn orajn harojn kaj barbon, purigis vestojn kaj komencis ludadon sur la harfo. Komence li ludis antaŭludon, sed poste ludis kanton mem, kiu tuŝis ĉiujn aŭdantojn kaj ankaŭ lin mem. Ĉia kunvokajo aŭdegis preĝete la kanton de Vanemuno. Rivero „Embat” sinĉesis de fluado, la vento forgesis sin rapidigi, arbaro, birdoj kaj bestoj aŭdis profunde tuŝitaj kaj resonanto mem sin rigardis trankvile tra folioj. Sed al

ĉiuj de aŭdantoj komprenis tutan kanton. Montoj, kaj intermontoj jeaŭskultis bruegadon, kiu estis al Dio subirinte Embat' malforgesis vestojbrueton, kaj ĉiuprintempe, kiam Embat' fluegis, ĝi bruas tiel, kiel aŭdis en tiu fojo. La vento alpropris la malmolajn sonojn. Al kelkaj bestoj agrablis sonaĵojn de turnado de turniletoj, kaj aliaj enprenis en la senco sonoretadon de ludfadenoj de harfo. La kantantaj birdoj ellernis antaŭludon, aparte -la luscino kaj alaŭdo. La fiŝoj estis plej malfeliĉaj, ĉar ili elmal-tiris kapojn nur ĝis okuloj, sed orelojn restis en la akvo. Ili vidis movadon de buŝo, kaj faris laŭe, sed de l'kantado mem ĝi aŭdis nenion-tial restis malvoĉaj. Sole homo komprenis tutan kanton. Tial kantado homa iras de profundaĵoj de koro ĝis plej altaj loĝejoj de Dioj. Vanemuno kantis pri grandegeco de ĉielo, pri beleco de tero, pri belegeco de bordoj de la Embat kaj pri feliĉo kaj malfeliĉo de homa geno. Li mem estis de lia kantado tuŝita, kiel larmoj fluis tiom multe, ke liaj ses vestoj kaj sep ĉemizoj fariĝis malsekaj. Fine Vanemuno flugis je la ĉielo al sian avarulon. Tie li kantas kaj ludas senfine. Sole indaj oreloj povas ŝūdi la belan kantadon de Vanemuno.

わたしは、はっきり誤植とわかるものは訂正した。しかし、現代からみると、へんてこな表現がかなりある。malforgesi はおもしろい。Wüster, Enciklopedia Vortaro Esp.-Germana, 1923 には malforgesigi がある。

harfo は、なん回もでてくるので、harpo のつもりであろう。

luscino, alaŭdo には、ラトヴィア語の注をしている。まえのものは lakstigalia, あとののは zihrulis と。alaŭdo は、すでに Zam., Plena Vortaro Rusa-Internacia (N-ro 17), 1889 にあるが, luscino はない。Butler, Esp.-English Dict., 1967 には, luscino (blugorgulo) (orn.) bluethroat (Luscinia) > thrush nightingale とある。> は, wider meaning than という記号。PIV, 1970 には, luscino はない。

al sian avarulon のように, al のあとに -n を用いている例が, ここにもある。

vestojbruetoj. 文法の合成語のところに, piedojsignoj がある<sup>12)</sup>。

1.8. くみあわせとくりかえしによる単語学習法。たいしたことはない。

1.9. Internacia-Latva vortaro. 語根は, Einstein におなじ。欠けているもの : kred, naz, pag, simpl.

koron-kronis, wainags は注目すべきものである。

1.10. Latva-Internacia vortaro. これには, kred, pag, simpl があるが, やはり naz がない。

kronis-koron. wainags-koron.

teepigs-abstin. abstin は, Einstein にはない。Plena Vortaro Rusa-Internacia にもない。

1.11. 書目。Nomaro de l' verkoj pri la lingvo internacia (Esperanta), kiuj eliris ĝis Marto 1889. という題がついていて N-roj 1-20 である。その最後のところは

20. L. Einstein, Weltsprachliche Zeit- und Streitfragen.

21. R. Libek, Starptautiska waloda.

これによって, つぎのことがいえるのではないか?

1. Libeks の本は, 1889 marto までに出版された。

2. Libeks が見ることのできたのは, 20. Einstein, Weltsprachliche Zeit- ... までで

はなかるうか？

しかしながら、他の本についている書目をみると<sup>13)</sup>,

20. Einstein, Weltsprachliche Zeit- und ....

21. Zam., Meza Vortaro internacia-germana.

22. Henry Phillips, An Attempt towards an international language.

.....(略)

26. de Wahl, Vortaro Esp.-hispana.

.....(略)

28. Klubo Nurnberga, L. I. Vollständiger Lehrgang.

29. R. Libek, Starptautiska waloda.

とある。(略)はわたしがやったもの。

26. de Wahl, の *cenzura dato* は 1889-01-09 であり, Libeks の *cenzura dato* は 1889-03-20 である。よって, つぎのように考えねばならない。

1. Libeks は, 21-28の存在をしらなかつたのか？

2. あるいは, Libeks の原稿のできたとき, それらのあるものは, まだ出版されていなかったのか？

3. 1あるいは2のため, じぶんの本の番号を, 20. Einstein のつぎ, すなわち21としたのではなかるうか？

注意を要することは, *cenzura dato*, N-roj の順序とじっさいの出版の時日とは, かならずしも一致しないのである。

それから, たいていの本には, タイトル・ページに N-ro がついているのであるが, Libeks にはついてない。

Waringhien は, 1889-09 の Esp. 界はじめての雑誌 La Esperantisto の発刊までの文献を, *incunabula* と称している<sup>14)</sup>。すなわち, 番号でいえば, 1-30である。Libeks は 29であるから, このなかにはいる。

#### 注-2

3. Enciklopedio de Esp., Budapest, 1932-1934 の Libeks のところに “Ĝi estis la unua lernolibro, presita ekster Varsovio, aperis 1889 ĉe Sichman, Riga, notita en la listo de unuaj E-libroj kiel n-ro 29.” しかし, 1882 に Einstein (N-ro 15) が Nürnberg からでているし, Henry Phillips, An Attempt towards an International Language by Dr. Esperanto (N-ro 22) が, 1889 に, すでに New York からでている。

わたしの手にいれた Libeks の fotokopio には, Jos. Rhodes のゴム版があるから, 原本は, かれの旧蔵本である。Rhodes は English-Esp. Dictionary の著者で, この辞書は日本でも, よく用いられた。

タイトル・ページの最後の行は, 印刷所のアドレスである。2つの通りのカドにあることを示すが, 固有名詞など, わたしには読みこなせないところがあるので, 訳をつけなかつた。

4. ロシア帝国時代は, 出版物は, かならず事前の検閲をうけねばならなかつた。この検閲の日づけがあるため, 原稿の完成の時期が, およそ推定できる。参照: Holzhaus, Doktoro kaj lingvo Esp., 1969 の Zam. kaj cara cenzuro および cenzuraj datoj.

5. Holzhaus, Doktoro...

6. L. Einstein, La Lingvo Internacia als beste Lösung des internationalen Weltsprache-Problems. Vorwort, Grammatik und Styl nebst Stammwörter-Verzeichnis nach dem Entwurf der pseudonymen Dr. Esperanto. 1888. Nürnberg. (No 15).

- Einstein が格を4つにしたのは、ドイツ語が4格だからである。Esp. の文法からいえば、格の語尾形式は2つしかない：la patro と la patron. 他の格機能は前置詞によって示される。もちろん、Einstein, Libeks のは、文法といっても、科学的なものではなく、初等独習書なのである。
7. N. Kawasaki, Origino de Korelativa Tabelo, Oomoto, 1975, sept.-dec.
  8. Einstein, p. 26 に "...mi permesas al mi, proponi al Vi mian servadon por la vakanta loko (okupado)."
  9. Ekzercoj は、おのおの独立の、みじかい文を、272も集めたもの。ただし, tian, kian,... は tiam, kiam,... となっている。
  10. のちに Dombrovski が転載している。
  11. je- の造語は, Zam. はあまり使わなかった。Dua Libro に jelabori, La Rabistoj に jejuri など。PIV は Esp. の historia evoluo を示した辞典ではないので, いまは arkaismo になっている je- はあげてない。ただし, jejuri は La Rabistoj という重要な著作にあるので, 例外的にあげている。
  12. Zam., La Rabistoj に librojrimeno がある。Zam. の使った形は piedosignoj である。-j- はめずらしい。
  13. たとえば, Zam., Ekzercaro, (N-ro 72), 1894.
  14. G. Waringhien, La Inkunabloj de Esp., Germana Esp.-Revuo, vol. 27, 1974, N-ro 7.  
N-roj 1-30のうち, 伊東幹治, 京都の集めたのに, わたしじしんがさがしだしたのを加えても, 原本および fotokopio は, 19個にすぎない。すなわち, われわれのところ完全にないのが8個で, 3個はあることはあるが, 部分的にかけたところがある。

## 2. リトワニアの Dombrovski

2.1. タイトル・ページ。リトワニア語のものは図版にある<sup>15)</sup>。Esp. 文のものもついでるので、それをここに示す。

Lernolibro de la lingvo internacia por Litovoj eldonis P. A. Dombrovski—Tilzito, 1890. Presejo de J. Schoenke.

2.2. ページ数。62+VII p.

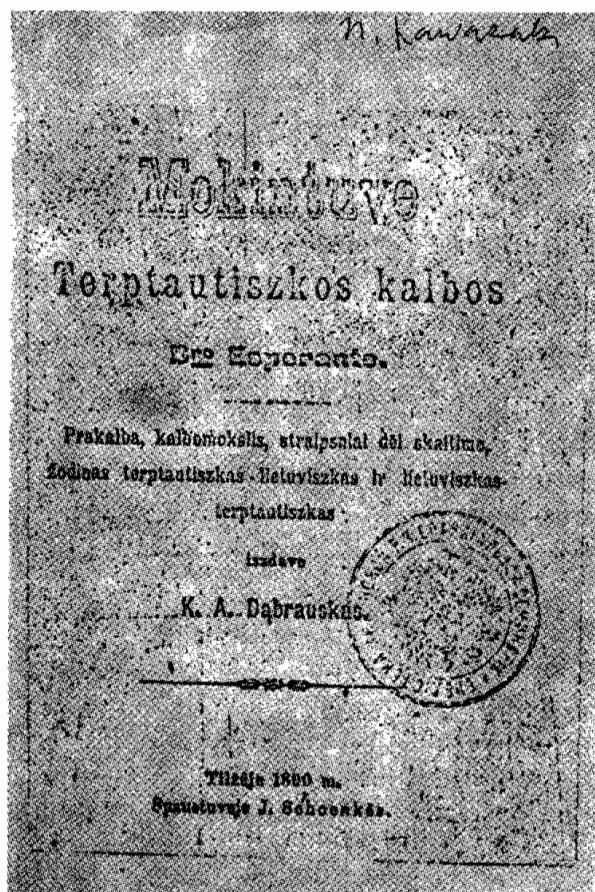
2.3. 著者。リトワニア語では, Dąbrauskas. a は a の鼻音を示すつずり字であるが, これは語源的のことで, 現在の発音は鼻にかからない<sup>16)</sup>。Grabowski は Dombrowski としている<sup>17)</sup>。Zam. もまた Dombrowski としていることがある<sup>18)</sup>。

P. A. (Esp. 書きタイトル・ページ) と K. A. (リトワニア語書きタイトル・ページ) のように, どうしてことなるのか? A. は Aleksandr であるが<sup>19)</sup>, Dombrovski はカトリックの司祭であるので, P. は Pastro または Patro で, K. はリトワニア語の Kunigas 'pastro' であろう。

1860生れ, 1938に死んだ。Esp. をはじめたのは1887で, Zam., Adresaro の番号は186。登録のときの住所は Ustjujina, gub. Novgorod<sup>20)</sup>。

かれの biografio は Enciklopedio de Esp., 1933 にある。ラトヴィア人で, カトリックの司祭。Zam. のかれに対する手紙はすこぶるおおい<sup>21)</sup>。カトリック関係のもの訳のほか, Pri Novaj Trigonometriaĵoj, Pri unu speco de kurbaj linioj, 1906 のごときもある。Ĝin parolos ĉiu homo, ... Kaj hebreo kaj kristano, Kaj litovo kaj japano, ...." の文句のある Nova Kanto (Fundamenta Krestomatio にある) は, 日本人にもしたい。

2.4. 出版の場所。Tilzito は, 現在は, リトワニア共和国のなかにはいっているが, 出版当時は, ドイツ領であった。リトワニア語での出版が, ロシア帝国時代では困難であ



ったので、国外の Tilzito で出版し、ひそかに本国へもちこんだのである<sup>22)</sup>。Tilzito は、Napoleono が敗戦ののち、ツェールと条約をむすんだところ。

2.5. 出版の年代。タイトル・ページに1890とある。巻末の国際語書目は、1890、11月まででだものをあげているが、40. Zam., Vsemirnyj Jazyk までである。この本の検閲の日づけは1890-07-29であり<sup>23)</sup>、La Esp.-isto, 1890 nov. のなかに<sup>24)</sup>、“Post kelkaj tagoj eliros nova paralela eldono de nia lernolibro por rusoj,....”とあり、これは Vsemirnyj Jazyk のことと思われるので、Dombrovski の本の出版は、おそらく1890 nov.、またはそれ以後でないかとも考えられる。参考にすべきものとして、La Esp.-isto, N-ro 4, 1891 apr<sup>25)</sup>。に“.... eliris lernolibro de nia lingvo en la lingvo litova (litauisch)...”とある。もっとも、本が出版されたとき、Zam. がそれをうけとったときのあいだに、どれだけ年月がたったかは問題である。

2.5a. まえがき。リトワニア語書きのものだけで、Esp. 書きのものはない。74行。その要点：

“世界の交通は発達しつつある。国際語の存在は各民族を近ずける。国際語をはじめて具体化したのは、Volapük であったが、学習がむずかしい。その点、Dr. Esperanto の Lingvo Internacia はすぐれている。American Philosophical Society もこの点を認めた。いろんな国ぐにて、すでにこの国際語の学習書が出版されているが、ラトヴィアでも、

Libeks が学習書をだした。リトワニアでも、学生たちがこの国際語を学ぶことによって、かれらの外国語についての重荷がかかるようになるようにしたい。”

2.6. 文法. Libeks とおなじやかたでないところがある。

Libeks

Nom.	la patro	tehws
Gen.	de la patro	tehwa
Dat.	al la patro	tehwa
Aks.	la patron	tehwa

Dombrovski

Vardlinkis :	laukas	la kampo
Gimlinkis :	lauko	de la kampo
Duodlinkis :	laukui	al la kampo
Skundlinkis :	lauka	la kampon
Vietlinkis :	lauke	en la kampo
Taislinkis :	lauku	(je, kun...) la kampo

単数のばあいだけをここに示したのだが、リトワニア語の格をぜんぶだして、それに対する Esp. の用法を説明している。

分詞のところ、Dombrovski は, far'ant'e, far'int'e など、副詞形のばあいをあげているが、Libeks は (Einstein も) そうしていない。

もちろん、Dombrovski には, infinitivo (-i) はぬけていない。

Libeks にある korelativa tabelo は、Dombrovski にはない。

Libeks がやった la bonaj patroj, la bonajn patrojn のような“形容詞+名詞”の用例を、Dombrovski は示していない。

2.7. 読みもの。

2.71. Zam. の著書から採用したもの。

- a) Patro Nia. Unua Libro から。
- b) El Genezo. Unua Libro から。
- c) Popoldiroj. Dua Libro から。
- e) Al la fratoj. La Esp.-isto, 1890, N-ro 7 にのったもの。

2.72. Zam. 以外の人たちの著書から採用したもの。

- a) Leteroj. 2つあるが、Dombrovski は Libeks から採用したと注している。  
第1のもの (Riga 22. II. 80).

Libeks

transsendas  
rapidos ĝin foririgi

Dombrovski

sendas  
rapidos ĝin vastigi など。

第2のもの (Paris 2 VI. 88). Libeks は Einstein から採用している。

Libeks : Paris, 2 Julio 1888 (Dombrovski : Paris 2 VI. 88).

Libeks : Mi havas filon, kiun mi volas sendi Vin urbon pro lerni (Dombrovski : por lerni) bone la anglan lingvon. .... skribas senerare la francan kaj italan lingvon (Dombrovski : la francan kaj italan lingvon).

b) telegramo. Libeks にあり、Libeks は Einstein から採用したのものであるが、それぞれすこしずつちがう。

Libeks, Einstein にある (Mi venas morgaŭ....) が Dombrovski にはない。

Einstein, Libeks とともに ... sendu veturilon garon” だが, Dombrovski には garon がない。garo は現在は, stacidomo を使う。

c) Grabowski, Kondukanto internacia de l' interparolado kun modeloj de leteroj (N-ro 37), 1890 のなかの Sur la fervojo<sup>26)</sup>。

Dombrovski の p. 21 の第 8 行と第 9 行のあいだに, Grabowski の 18 行が略されている。また, Dombrovski の最後のあとに, Grabowski ではまだ話しがつづく。

2.73. Dombrovski じしんの作品。

a) Litovaj Popolkantoj : I. Mizero. II. La malliberulo.

b) El Nadson (rusa poeto).

Litovaj popolkantoj を訳するにいたったのは, Libeks の Latvaj Popolkantoj に刺激されたためであろう。

I. Mizero は, のちの Grabowski, La Liro de la Esperantistoj, 1893 と Fundamenta Krestomatio にも, Dombrovski のものとして, のっているが, すこし直されたところがある。たとえば,

Dombrovski	Grabowski	FK
Kaj je l' brilantaj viaj glavetoj	Ed per....	Kaj per....

II. La Malliberulo も, Grabowski, La Liro... と Fundamenta Krestomatio にのっている。

Dombrovski	Grabowski	FK
Mi metus oran ringon je l' muro	... je l' muro	... al l' muro
Mi metus pecon de l' blanka neĝo	... da blanka neĝo	...da blanka neĝo

El Nadson. Nadson (1862-1887). 80年代という反動時代に, 平等と希望を美しい形の詩であらわしたが, はやく結核で死んだ。

Amiko, frato mia, laca, doloranta,—  
 Fortigu la animon je l' sankta espero!  
 Ne rigardu, ke nune malbono regnanta  
 Estas sur la lavita de la larmoj tero!  
 Ne rigardu, ke oni pelas idealon,  
 Ke la sango fluadas senkulpa tioma!..  
 KREDU estonta tempo detruos Baalon,  
 Kaj ree venos amo al la speco homa.  
 Ho jam ne pezan krucon, ne ĉenojn portanta  
 Ne kun koro vundita je l' fero ĝi venos:  
 Sed montros si je l' forto kaj gloro brilanta,  
 Kaj torĉon de l' feliĉo en la mano tenos.  
 Kaj ne estos sur tero la malamikemoj,  
 Nek de l' malliberuloj malfeliĉaj miloj;  
 Nek la tomboj senkrucaj, malsatulaj ĝemoj,  
 Nek larmoj nek la glavoj nek la pendigiloj.  
 Kaj tiu ĉi alveno, kREDU, kara frato,  
 Ne estas la espero aŭ revo vanega,

Ĉar mondo de l' malbono estas tro premata,  
 Ĉar nokto ĉirkaŭigis nin tro mallumega.  
 Jes, fine la homaro, je l' turmentoj sata,  
 Ĉesos trinki la sangon, forĵetos batalojn,  
 Kaj levos la okulojn je l' amo benata  
 Kaj komencos soifi sanktajn idealojn.  
 Kaj la popoloj diros unu al alia:  
 Ni estu la amikaj eroj de l' homaro,  
 Kaj la frateca himno de la preĝo nia  
 Eksonoru en unu jam ĉiupiaro!

わたしは、巻末についている正誤表によって訂正した。また、それにはないが、あきらかな誤り（たとえば、eu-en）は直しておいた。

Dombrovski は、ĉiupiaro に Visatine Bažniczia (Eglise universelle) と注している。

## 2.8. Vortaro Esp.-Litova.

伊東幹治は、don, el, elekt, frot, iom, magazen, plaĉ, pres のないことを指摘した<sup>27)</sup>。また、lad, nul があることに、疑問をいだいた<sup>28)</sup>。いずれも、この程度の小辞典としては、うへの指摘と疑問は当然といえよう。辞典の記載は

lad užvargęs                      nul debesis

とあり、debesis は雲であるので、Esp. とリトワニア語との意味が一致しない。また正誤表に

lad užvargęs — lac nuvargęs  
 nul — nub

とあるので、lad, nul は、誤植であることがわかる。

## 2.9. Vortaro Litova-Esp.

あたらしい語根はない。

## 2.10. 書目。1890, 11月までにでた Esp. の書目。

Nielsen, Lernolibro por danoj がぬけている<sup>29)</sup>。それで、Bogdanov, Lernolibro por bulgaroj 以下の本の番号が、すくなくなっている。すなわち、Bogdanov は33となっているが、他の本の書目では<sup>30)</sup>、34。この書目には、Dombrovski じしんの本ははいっていない。もしいれるとすれば、もちろん一番最後、すなわち41となるはず。他の本についている書目<sup>31)</sup>では、Dombrovski の番号は47。41とならず、47になったのは、2.5. 出版の年代に述べた事情にもよるのであろう。

それから、たいていの本には、タイトル・ページに N-ro がついているのであるが、Dombrovski にはついてない。

### 注—3

15. わたしの手に入れた fotokopio には、原本の所有者を示すゴム印がおしてあるが、複写があざやかでないので、読みくたせない。

16. Leskien, Litauisches Lesebuch, 1918 :... die Schreibung mit dem Nasalzeichen ist also eine etymologische, keine lautliche. なお、E. Orvidenie, Učebnik litovskogo jazyka, Vil'njus, 1975. Nasalzeichen は a e i u の4つ。

Dombrovski 時代と現在では、つずり字法がことなることがある。例 : sz-š.

17. La Liro de la Esp.-istoj, 1893.

18. Fundamenta Krestomatio.
19. Holzhaus, Doktoro kaj lingvo Esp., 1970.
20. Holzhaus, Doktoro kaj...
21. Originala Verkaro de Zam., 1929.
22. Naudzius, L'Omnibuso, N-ro 6, 1972 (ni laboru kaj esperu, 1974, Kioto, p. 281 に引用).
23. この本の fotokopio による.
24. Originala Verkaro, V-137.
25. Originala Verkaro, V-107.  
1890-01-03 のZam. の Dombrovski への手紙がある (OV V-107). “Mi ricevis de vi 3 rublojn kun peto elsendi vortaron rusan (plenan) kaj vortareton por Latvoj sed aparta vortareto latva ne estas eldonita, tial mi sendas al vi plenan vortaron rusan kaj *lernolibron* por Latvoj... Kun ĝojo mi legis, ke vi komencis la tradukon de la vortareto por Litovoj...” とあるが、この vortareto por Litovoj が独立に出版されたかどうかは、わたしは知らない.
26. わたしは、Grabowski, Kondukanto de l' interparolado kaj korespondado kun aldonita Antologio Internacia, dua eldono しかもっていない。Kondukanto の初版は、1890 (N-ro 39)で、Antologio はついていない (Stojan, Bibliografio de Internacia Lingvo, 1929による).
27. かれ所有の fotokopio のうえのかれの書きいれ.
28. “
29. Nielsen は Vsemirnyj Jazyk の書目にもぬけている.
30. Zam., Ekzercaro (N-ro 72), 1894.
31. Zam., Ekzercaro...

## む す び

Libeks も Dombrovski も、Zam., Unua Libro のあの長いまえがきをそのまま訳そうとせず (Henry Phillips (n-ro 22) は訳したが)、Esp. の役割をじぶんて簡単にまとめて述べている (Einstein (N-ro 15) のように論じまくりはしない)。文法の用例は、Zam., Unua Libro よりすこしおおいが、文法について、じぶん勝手な意見はだしていない (この点、のちの Huertas (N-ro 36) とことなる)。じぶんの国の文学を訳すことによって (その言語的表現には、つたないところはあるが)、Esp. の言語的発達にささやかながらも、チカラを与えているし、それぞれの国の人たちに、それらの言語によって、はじめて Esp. を紹介した功績はおおきい。

## Resumo

1. Libeks, Lernolibro por latvoj, Riga, 1889, (N-ro 29).  
Multe influita de Einstein, 1888 (N-ro 15). Ĉe Libeks mankas -int-. Rimarkindaj esprimoj : *jemetas, jefaris, vestojbruetoj, piedojsignoj*, k. a. Latvaj Popolkantoj. La monto “Dom” apud Dorpat. En Esp. -Latva vortaro mankas : *kred, naz, pag, simpl*. En Latva-Esp. vortaro estas *abstin*. En ambaŭ vortaroj kaj en la teksto ekzistas *koron*.
2. Dombrovski, Lernolibro por litovoj, Tilzito, 1890, (N-ro 47).  
Li konscias klare jam aperintan Libeks, Lernolibro. Al la 6 kazoj substantivaj de la litova lingvo Dombrovski donas E-ajn ekvivalentajn esprimojn. Dum Einstein kaj Libeks : *pro lerni la anglan lingvon*”, Dombrovski : ... *por ... Litovaj Popolkantoj*.

El Nadson (rusa poeto). En Esp.-Litova vortaro mankas : *don, el, elekt, frot, iom, magazen, plaĉ, pres.*

Ambaŭ aŭtoroj ne tradukas la tiel longan antaŭparolon de Zam., Unua Libro, sed koncize esprimas siajn ideojn pri Esp.

(La manuskripton verkis 1976-09-10)